

---

# 黒者～くろもの～

黒助さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒者くくるもの

### 【Nコード】

N8223X

### 【作者名】

黒助さん

### 【あらすじ】

世界には表と裏がある。表とは、皆が平和に暮らしている世界のこと。裏とは、その世界と反対で銃弾が飛び交う恐ろしい世界のこと。皆も、自分たちは平和に過ごしているが、地球の裏では戦争が起きているのかあゝ、なんてものを感じたことはあるだろう？それと同じ。そして、この世界は表に裏の事情をさらすのは絶対にいけないのだ。絶対に。しかし、さらしてしまった者達がいた。そんな人たちと一般人の主人公が世界中を逃げ回る物語。 不定期です。すいません……。

## プロローグ

それはいつもより暗い夜の事だ。  
とある商店街の汚い裏路地で、命を賭けた鬼ごっこが始まっていた。

髪型はポニーテイルで、動きやすい黒い長袖のシャツに、膝より少し高めのスカートを履いて、物騒なM92FS（サブレッサー装着）を持った少女がゴミ箱の陰に隠れている。

そこに走って逃げる、大人くらいの影が少女の前を横切って、T字路を右へと曲がった。

するとスツとほとんど音のない動きで壁により、相手を追いつつ耳元のインカムにそつと手を寄せる。

「……目標を確認、指示を。」  
「うーん、もう少し先が大通りだよ。たく、早く見つけて始末をしてくれ。」

少女のインカムからは、やる気の無い男の声が聞こえる。

はぁ、と一つ溜息を漏らすと、壁から出つつ、了解、と呟いた。

そこからは一瞬だった。

サブレッサーによる気の抜ける音が聞こえ、小さい銃弾は男の頭に穴を開けた。

脳髓が少し飛び散り、壁を赤黒く染め、男はうつ伏せに倒れる。

しかし、少女の表情は変わらず、ただ、冷たく、死体となった男を見つづけた。

すると、インカムからヒュウ、という口笛が聞こえ、男の声が耳に入る。

『やるじゃーん。でも、今日はさすがに疲れたろ？死体の処理はマ

「ヤ君がやってくれるから、帰ってこい。」

「……ふん」

その声に鼻で笑い、返事をする。男はと言うと『つれないねえ』  
なんて呟いていた。でも、いつも通りなことなのか慣れているように笑っている。

少女はインカムの電源を切り、暗い暗い闇へと足を進めた

\*

「はあ…今日の調子は最悪か…。」

そう呟きながら彼は学校へ続く、いつも通りの道を歩いていた。  
彼は橋辺 はしべ 冬樹 ふゆき という名前で、性格は中立思考、あだ名は根暗、  
評判は残酷な奴と、とても良い人そうではないが先生からの評判は  
良い生徒である。

顔は中性的で、整っている。が、前髪が長く、その顔を隠している。  
髪の毛は首辺りで切りそろえ、アホ毛が天辺で踊っている。体  
つきは丸く、友人曰く「男の娘」らしい。しかし、彼は持久走では  
とても早く、大会で優勝し、全国では四位に入る素晴らしい成績を  
収めている。

そんな彼は本日十二回目となる溜息を漏らし、目を擦る。良く見  
ると彼の眼元には隈が出来ていた。そう、寝不足による倦怠感であ  
る。

しかし、彼は商店街に入ったところだとあるものを見てしまった。

「わあああ…遅刻しちゃうじゃん」

そう、時計である。しかし、短い針は八の数字を差し、長い針は三十五の数字を差しており、学校に着くころには鬼の顔を持つ体育教師に会うであろう、と推測できる時間帯だった。

しかし、商店街から歩いて十分、走って五分の場所にある、『朝町市立高等学校』には裏ルートなるものが存在し、そこを通れば歩いて二分で付くのである。

彼はその存在を知っており、その裏ルートを通って行くことにした。小さい道を体の側面から入ることにより先へ進み、丁度、少し広い道に入ったところだった。

「え…？何だ？酔っ払いか？」

彼の目の前に、壁に背を預け、足を投げ出し、頭をだらしなく垂らしている男が座っていた。

しかし、ピクリとも動かず、寝息も聞こえない男に違和感を持った彼は、男へと近づいた。

この後の彼は、この男と話さなければよかったと後悔する。

なぜなら、男が座っている地面には、乾いた血糊が広がっており、<sup>たか</sup>ハエが集るほどの腐乱臭がしていたからである。

「え？…え？あ、ああ、わあああああ！」

彼は目を見開き、脳がノルアドレナリンの活動性を高めていく。心臓がバクバクして鼓動が激しくなるのを覚え、パニックを起こしていた。

（何でなんで何でナンデ！ひとが、しししし、死んで！……死んでいるんだ！）

「うううう……おええ…げええ……っはあ！……はあ！」

皮膚から玉汗が噴き出て、滝のように流れる冷汗が、彼の受けた恐怖を表している。男の腐乱臭に耐えれず、彼は胃の中身を地面にぶちまけた。歯はカチカチと音を立てている。

落ち着け、落ち着け、落ち着け！、俺は見つけたただけだ！と、何度頭の中で叫んでも震えは止まらない。しかし、ふと何かを思いつき、震える手で携帯の、1、1、0という、警察への番号を押した。

数分が経ち、警察たちが調べ始め、彼にも事情聴取をする。彼は落ち着きを取り戻していたのか、少し震える声でどういった状況で遭ったのかを話した。

すると、死体の確認をし終えた警察は驚愕した表情で死体をブルーシートに包んで持っていった。

彼はその素早い行動に、あんな風に持っていくものなのか？と疑問に思ったが、聞くことは出来なかった。それどころか、

「君、もう今日は疲れたろ？さっ、帰ってゆっくり休みなさい。」

と、急かすような言い草で彼を帰そうとする。

一体、何なんだ？と呟き、帰路を辿り、自宅へと向かった。

この一件が彼の人生を左右させるものだと知らずに……。

## プロローグ（後書き）

誤字、脱字、誤文、間違った表現等があれば連絡を下さい。

## 一話目（前書き）

黒者が何かは後ほど分かります…。

## 一話目

波瀬宮<sup>はげみや</sup> 春香<sup>はるか</sup>は自分の中で危険だというアラームが止まないことに焦りを感じていた。

彼女はポニーテイルをして、前列から三番目、窓際あたりの自席で、腕をまくら代わりに顔を伏せていた。

顔は、十人中十人が振り返る美少女と呼ばれるほど整っており、成績優秀、才色兼備等々、完璧超人である。

しかし、性格に問題があり、基本は無視。友人などはおらず、いつも眉の端を吊り上げている。

だが、今日は違っていた。突っ伏したまま表情が怒りに歪ませている。

理由はどうかやら、昨日の失敗についてだろう。  
仕事仲間の新入りがあるとある事故により任務を果たせなかったのだ。

(くそっ！)

何回も言ったこの言葉を頭の中でも繰り返す。

私が回収していれば…と。

しかし、時間と言うのは残酷で、一秒一秒が長く感じたのだ。

そもそも、彼女がこんな状態になった理由は、本日昼休みの事、小さいインカムから最悪な情報が来たからであった。

いつも通り、誰もいない　　というか、立ち入り禁止である屋上にいた。風が気持ちよく流れ、ポニーテイルがユラユラと揺れる。そんな気持ちの良い昼の屋上では、仮眠するのが彼女の日常で

ある。

彼女の非日常的で、しかし、彼女からすると日常的な『裏側』の仕事をする時間帯は夜中なので、貴重な時間であることは確かだ。

そんな中、インカムに通信が入り、彼女を無理やり起こす。

うるさく鳴るインカムに手を寄せると通話開始のボタンを押した。

「何だ？私は今眠っている最中なんだが？」

『……………緊急事態発生。寝てる時間、無い。』

小さく、しかしスツと冷たく通り抜けるような少女の声に、彼女は眉間にしわを寄せ、詳しく話せ、と急かすように言った。

『……………前回の任務、失敗。死体が警察に……………』

「……………なに？」

少女の言葉を聞き、体を勢いよく起こした彼女は、更に機嫌が悪くなる。

詳しく聞くと、前回の任務の後片付けの際、他の組から攻撃を受け、死体を失くしたとのこと。血痕は綺麗に拭き取った後なので、死んだ場所から離れたところであると推測を立て、探していた際にある少年が死体を発見し、警察へと連絡をしたそうだ。

彼女はそれを聞いて、とても大きなため息を漏らした。

（くそつやはり新人に任せるものじゃなかったか…！）

「…ちいっ」

舌打ちしても、後悔をしても何も変わりはない。首を振ってそう思いなおし、更に質問をする。

「マヤはどうだ？」

『……………銃弾、二発、重症。』  
「命に別状はない、か…。」

話し方から考えると、インカムから聞こえる少女の言い文は、マヤは襲撃の際、銃弾が二発腹を抉ったが抗戦をし、何とかその場からの撤退に成功した。とのことだ。

しかし、銃弾を二発も喰らったのは痛い。今は本部の方で治療中だそうだが、重症であるため、ヘタに動くことは出来ない。

彼女は一度目を瞑り、数秒後、もう一度開ける。他にしなくてはならないことは、その一般人に口止めさせねばならないということ。これ以上一般人に広まれば、『黒者』になりかねないのだ。

彼女はスツとその場から立ち、行動しようとするが、

『……………授業、始まる』

「……………おい、それよりしなければならぬことがあるだろ？」

『……………サボり、ダメ』

「……………はあ？」

どうやら、少女はサボらせてはくれないようだ。

\*

彼女にとって、だるいだけの、午後の授業が終わり、ホームルームを迎える。しかし、彼女は先生の口から出る言葉を受け流し、誰が死体を見つけたのか考えていた。

怪しい奴は三人。その三人は全員休んでおり、病状も発覚しているが、そんな中でも最も怪しい奴がいる。名前は『橋辺冬樹』。奴の病状だけ可笑しかったからだ。

(しかし、頭痛が痛いから休む、って…。)  
「……………くっふふ……………」

その病状は彼女のつぼにはまっていた。彼女は、いや、誰でも分かるようにそれは仮病の類である。朝、「先生はビックリしました」「なんて言いながら」橋辺君は頭痛が痛いそうなので「と担任が言ったので良く覚えていた。

閑話休題。

しかし、仮病を使うほど今日は嫌な日ではないのだ。テストなどもない、いつも通りの退屈な授業ばかりの日。なのに休む必要があったのだ。

つまり、彼なのではないか? と思い、職員室に行き、担任の浜坂先生に橋辺君の住所を聞く。浜坂先生はとても不思議そうな表情をするが、お見舞いに行くというと手を頬に添え「あらあらまあまあ」なんて言いながら青春ねえ」と呟いた。

このババアめ、なんて思いながら住所を早く聞かせてくれと頼む。すると、今日出されたプリントと、住所の書かれたメモ用紙を渡される。とても嫌な笑みで。

この教師は、なんて変態なんだ…なんて思いつつ礼を述べ、職員室から出た。と同時に、溜息を吐く。本日、十七回目の溜息だった。

## 一話目（後書き）

誤字、脱字、誤文、間違った表現等がありましたら、ご連絡を下さ  
い…。お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8223x/>

---

黒者～くろもの～

2011年11月16日22時29分発行